

特集

日常診療における角膜内皮

序 論

雑賀司珠也*

今月号は、角膜内皮の異常を特集しました。取り上げられた4疾患とも、日常臨床では、水疱性角膜症に至りうるということで、極めて重要な疾患ですし、患者さんへの予後説明にも気を遣う場面が多いと思います。落屑症候群での内皮異常は、白内障手術や複数回の緑内障手術に伴うものなど、悩まされたご経験をお持ちの読者もいらっしゃると思います。

小生が医師になった昭和63年当時は、全層角膜移植で対応されていましたが、現在、DSAEK (Descemet stripping automated endothelial keratoplasty), DMEK (Descemet membrane

endothelial keratoplasty) に代表される内皮移植のいわゆる「パーツ移植」が日常臨床に浸透しています。また近年、臨床的に重要なポイントだけではなく、基礎研究の面からも角膜内皮異常の病態研究が進んでいます。内眼手術も進歩し、遺伝性疾患やウイルス性疾患の病態解明も進みました。これらの基礎研究成果から、手術に頼らない治療戦略が開発される日がくると信じます。

最新の臨床的知見のみならず、基礎的研究の最新情報も盛り込まれた読み応えのある特集となりましたこと、編集委員として、とても嬉しく思っています。読者の皆様もぜひ、熟読していただければありがたいことと思います。

* Shizuya SAIKA 和歌山県立医科大学眼科学講座